

山中ヒアリング3

地域の歴史・文化に学び ものづくりと連携して観光地の発展を

山中温泉観光協会会長上口昌徳さん

山中の商工会長と観光協会会長を兼務。後者は先任者から41歳のときに引継ぎ、77歳の現在まで。この間地域の疲弊をみてきたが、私が託すことができるひとがいればと考え、最近40代くらいの人たちを集めて、次を担う挑戦をしないのかという話をしたら「百歳まで生きてください」といわれてしまった。

地方が疲弊しきっている。地方行政の貧困が根底にあると考えている。

観光地についてのフィロソフィー（哲学）



観光協会長を引き受けたときに掲げたのは、地域をどう活かすかということ、全体の繁栄があって個の繁栄があるという理念を共有すべきだということ。

私が観光協会長に就任した当時は、規模の利益を優先する発想が強かったが、45歳のときに2百人の客がはいる旅館を20人にしてしまうということをした。父親が海外旅行に行っている間に従業員を集めて全部解雇してしまうというとてもない親不孝をした。

3年半の間、親には絶対許さんといわれた。

昭和48年のオイルショックのとき、原油価格が一夜で4倍になった衝撃があった。不況の波はまたやってくる。そのときに犠牲になるのは中小零細企業で、また地域が疲弊していくと思った。これを転換するために旅館を休業した。

この断行は、文化を下敷きにしたなりわい、地方が大都市に対峙して生きていくためにはそれしかないのではないかと考えたから。

23歳のときから世界中を旅行して回ってくる中で、そういう考えを身につけてきた。今の旅館は45歳のときに始めたもの。

現在危機の時代で、旅館がどんどん潰れている状況。今月中にも、また2館がつぶれるという話。対前年6割しか客がないという状況だが、私の旅館はなんとか持ちこたえている。こういうなかで生きていけるのはこうした旅館ではないか。

観光地は人間性回復の場

「かよう亭」には、客の予約がアメリカからも入ってくる状態。一泊4,5万という水

準で、全く日本的なたたずまいと、もてなししかないところを、海外の客が評価してくれる。広告や営業は一切していない。外国の客は友人に教わったとのこと。こういう口伝いで客が確保できている。

これからが大変な時代だが、チャンスでもある。

1日15人の客があれば十分に生きていける。富を蓄えることはできない。こういう文化活動は金儲けをしようと思っただけではいけない。観光地化することは滅亡への道。

チャンスというのは、1日7、8人の客を相手に濃密なおもてなしや気配りができるということ。その結果客の満足度が高まり、それを他の人に伝えてもらえると思う。

従業員には、食べていけること、誇りをもって客と接することが仕事のしがい、生きがいではないかと話している。

マニュアルは全くない。自分を無にして相手に奉仕する。欧米流の経済的なホスピタリティではなく、日本の精神文化としてのおもてなし。無形の文化を大事にすることで地域は生きていける。

歌舞伎座があんな形に建て替えられるのは全くナンセンス。歌舞伎を楽しんでもらおうとするならば、単純な木造作りで周囲の環境をも整えるべきだと考えている。我々の地域はそういう道ではなく、対極にあって人間性回復の場としての地域づくりをしていく。かよう亭だけでなく、地域全体で。

新しい旅館を始めた30年も前、当時は銀行もお金を貸してくれなかったが、何とか事業が軌道に乗って、3年目に徐々に売上げが上がり、6年目には一億を超えた。ピーク時には3.5億の売上げもあった。

そのころ、片山津の百万石などの後を追うな、といって山中の店主を集めて、もてなしの仕方などを教えた。うちの女房はノウハウを他に教えるとは何事かと怒ったけどね。

今日お出ししているのは全て地元の器、菓子、家具。日本的な風情を生活の中に残し紹介するということがこのコンセプト。

地域文化の共有が観光地の生きる力



[鶴仙溪にかかる あやとり橋]

観光地として生きていくには、その地の文化を紹介すべきと考えている。

山中節の紹介。これは山中を訪れる文人の質の高さが生んだもの。これを地域の人が意識すべきだ。先日東京で道場道3郎さんのところで山中節のイベントをした。3万円の3加費で大勢3加してくれした。その地の、他に比類ないものを深めていき、財産として共有していく、生活のなかで楽

しみながら共有すること。観光産業という言葉はきらいで、観光関連産業と読んでいるが、無形の精神文化を、地域が共通の方向性・理念をもって捉えることがこれらの地方の観光地の生きる道だと思う。

歴史のある旅館の倒産 見過ごしてよいのか

加賀温泉峡という風には捉えていない。山代や粟津、片山津がどうなっているか。ここ50年で失ったものがあまりに大きく、取り戻すことは困難。経済本位の大資本、県外資本が買い叩いて営業している。

知事がそれに認可を与えたので、知事にそれでいいのか、ということを行った。

八百年の歴史のある旅館が倒れていくのを見過ごすのが為政者のすることなのか。山中だけは生き残る可能性を見出すことができる。加賀全体で捉えることはできない。

人間らしい生き方、たおやかさやさしさを享受することができることが重要。

芭蕉が心を許した 山中の優れた文化人

自然環境が手近にあることも魅力。緑や川がこの巒のような地形にあふれている。1689年に芭蕉が金沢にやってきました9泊したのだが、小松に1泊、山中に8泊した。これはなぜだろうか。

温泉や風景が良かったといわれるが、東北の温泉地も歩いてきているはずだが、そこではこのように逗留していない。私は、人だっただろうと思う。宿の主人が優れた文化人だったのではないかと考えている。骨の髄まで癒されるという芭蕉の言葉に我々は立ち戻り、再出発すべきだ。

顔の見える食材

第3次産業というが、農業も同じ。ここでは合鴨米を使い、食べ物の8,9割は作った人の顔の見えるものを使っている。その意味では吉兆のようにはない。観光地は限りなく本物を共有財産とすべきと考えている。面としての豊かさを求める。

「数字を追わず夢を追った」

山中の現状は必ずしもよいとはいえない。天皇も泊まった旅館でさえ廃業してしまった状況。

私は逃げおおせた、滅亡の道を避けることができた。

父は材木屋だったので、持っていた土地を使って旅館を大きくしていった。私自身は大きくしていくことには限界を感じていた。そこでオイルショックのときに大規模旅館をやめたのだ。山中の温泉も、昭和55年ごろに私の思いを伝えてついでに来てくれといったのだが、そのときにこれができるのは政治力があるひとだけだ、という反応があった。

しかし、私が始めたときには政治家や有力者とのつながりは全くなかった。楽天の副社長の本庄氏が来たとき、三木谷氏の拡張路線に疑問をもっていると話した。旅館を縮小したときになぜそれができたのか、と問われて「私は数字を追わず夢を追った」と話した。

自然景観を守るために裏山を買い取ったりもした。そんな思いを本条氏に話した。彼の後ろにいる若い者達を振り返ってみろ、ともいった。彼は2ヶ月後に楽天をやめた。彼は大変ショックを受けたそうだ。5年前に彼が横浜市の公立中学の公募に応募して校長をやった。

全体の繁栄があってこそ 個の繁栄も

ここには勅使河原宏や井上ひさしや、多くの文人が訪れた。その人々は全て私のよき伴侶。麻生太郎氏も訪れた。コロッケを食べているところを写真に撮られたことで、そのコロッケ屋が評判になったりもした。財産はできないが、人とのつながりという最高の財産ができた。政治での人脈は皆無。町議会での議長まで務めたが、政治の人脈は虚構。ここは政治家の憩いの場にはならない。

ただ、私だけが良くなることはありえない。この地域の文化全体が高まっていくことでしか理想の王国はできない。達成感は全体がそうならなければ味わえない。

県外資本に頼らず 本物志向を

現況は厳しい。30%から40%の県外資本が客を集めている。ゆげ街道の仕掛けをした桜井氏と話していたが、客の流れはあるがあまり買っていない。饅頭も少しずつしか売れない。コロッケだけは例外。手作りで本物のコロッケを作っている。消費単価は小さいが、客の流れはある。安ければ買うのではなく、安くて本物だから買うんだということ。

中国のものを安く売ることによって山中の漆器業界は走ったのだが、それは駄目だ。

県外資本の旅館が4軒できた。1万2千から1万5千円で出している地元旅館と同じサービスを6千円で売っている。これは設備投資をした借金を抱えていない強み。これと勝負したら地元旅館は潰れてしまう。これをどう食い止めるかは、地元、県、国の政策責任。

県外資本は再投資のつもりはなく、5、6年でもとをとったら去っていく。白銀屋がすでにゴールドマン・サックスから格安で売りに出されている。

こんなことでは地元は持続的に生き残っていけない。当面格安旅館のおこぼれで生き残ったとしても、その先は。

だから市や県、国の支援は不可欠。2兆円の定額給付金よりも、地域で使える資金を出してくれればよかったのだが。

自分の土地に愛着をもって、連携してより大きな発展を

戦後50年に失ったものを取り戻すには50年かかる。

目先のことばかりに心を奪われず、独自の戦略をとっていきたい。山中自治区だけはそ

うした道をいきたい。自治区は分派行動と思われるかもしれないが、おのおのが自分の土地に愛着をもって、それが連携して加賀市を作ればいいと思っている。

加賀と括られるのが私はいや。ただ、意識革命をさせて、全体の民度の高さを引き上げたという自負がある。他の地域と水準を落として比較されるのはどうも。とはいえ他の温泉から相談にこられることも多い。生き残るとすれば、自然と文化、人間の意識が鍵を握ると思う。未来の可能性はあると思う。

町全体を山中節の ゆったりしたリズムで

商工会は零細家業・生業イコール職人という切り口で地域振興を図るところ、観光協会では文化を柱に地域を盛り立てるもの、という使い分けをしている。

加賀市の商工会議所があるので、ここの商工会をつぶせという声もある。国の指導で最近商工会も文化活動を力を入れるようになった。山中節流しをやったりしている。山中節は自然の風景のなかで人を慕う叙情性、ゆったりしたリズムをもったもの。町全体を朝5時から夜十一まで、車を時速6キロの町にしたいと考えている。町全体をゆったりした町にしたい。宮本憲一先生が私の知恵袋だが、キャンパスの中は時速6キロだという話をした。もし可能ならそんな理想の町ができればいいと思う。ヨーロッパでは車を拒否するまちづくりになっている。それが私の理想。

合併には最初から反対だった。むしろ連邦国家をつくるべきだとおもっている。文化圏と行政圏が重なるのが本来と思っていた。

「僕のおうちも景色のひとつ」

昭和23年、当時の運輸省が「観光立国」論を立ち上げた。

当時の北國新聞の社主も文化での立国ということを言っていた。

国全体が観光立国を打ち出し、全国に標語募集をした。

そのなかの一つの特選入選したもので、東北の小学生の作品で「僕のおうちも景色のひとつ」というのがあった。茅葺の家なのか、山間の家なのか、それを誇らしげに見た少年の目はたいしたものだと思った。政府がこれを第一位に選んだのも大したものだった。

これが政策に盛り込まれていたら、日本はこんな国になっていなかった。ここに戻るには50年かかる。新幹線で地域が繁栄する道理がない、白山をぶち抜いて地域が豊かになる道理はない。それを見抜いてむしろ自分の地域をどう守るかを考えておいたほうがいい。

山中らしさは職人のおかげ

山中漆器についても、海外に職人を連れて職人展をしてきた。思想職人として、他の温泉地とちがう文化の体現者であるという意識を持って欲しいとおもった。職人がいる風土が土地のオーラを作り出す。それが他の温泉地にないもの。

片山津と山中の違いはものづくりの人がいるかないか。山中らしさは職人のおかげ。

私が議員をしていたときは職人には敵とみなされていた。中国から安いものを輸入してつぶれていく業界に対して、職人に対して意識改革を迫ったという経緯がある。使う人の目の輝きと向き合ってもものづくりをするべきだ、問屋に依存せずにやっていくことが重要だと訴えた。

問屋から完全に独立することはできないが、客と直接接する場を設けるべきだと考えた。そこでこれまで30人ほどの職人を海外に連れて行った。そのうちのある職人は万年筆に蒔絵をつけることで、ペリカン社と提携をするに至っている。輪島よりも山中ははるかに進んでいる。使い勝手のよさ。軽さと強さ。輪島漆器は鈍で洗練されていない。山中は伝統文化や過去の歴史、自然環境を大事にしたまちづくりで生きていく。温泉を固有財産にして、みだりに掘らせないようにしている。

観光地は「僕のおうちも景色の一つ」という原点に戻るべき。私もあと十年は生きたいが、あと5年ほどは観光協会会長を続けることになる。

《上口会長との質疑の一部》

多様な客層にあった多様なサービス提供をしていくのか

竹味教授 日本地域経済学会の2代目会長、杉野先生が「京都の観光」という本で、観光とは何か、という話をしている。国の光を見せる、自分達のいいところを見せるということ。京都は歴史と文化を土台とし、近代的なものを付け加えているが、その両者のバランスが重要とっている。湯布院の亀の井別荘に泊まったことがあるが、あそこも伝統的なものをベースにしている。京都も湯布院も若い人が集まってきている。湯布院の中谷さんが名刺に「九州湯布院」と書いている。大分でも湯布市でもない。

難しいのは近代性との関係。山中でも湯快リゾートができて観光客は増えているという。それをいかにして宿泊や消費に繋げるか。かよう亭がオイルショックのときに方針転換したのは先見の明と思う。バブル後にそうした転換を図ったところは多い。しかし全てがその方針を採ることは難しい。多様な客層にあった多様なサービス提供をしていくのかどうか。

地域の文化性を生かし ホンモノのサービスを

上口会長 イタリアで観光拠点づくりに成功した事例を聞いた。地域の文化性を掘り下げてそれを活かして拠点をつくっているところ。これは湯快リゾートや星野のように、自分の考えを押し付ける感じではない。星野氏も本質的にはエコノミックアニマル。エンリコ氏はもともと考古学者だった。彼はエコでラグジュアリーであることを主張した。会ってみるとそんな人で、6月に家族づれでこちらにまた来るということに。記念講演のなかで、私の発想していることをすでに日本でやっている人がいる、と紹介してくれた。

エクラグジュアリは本物をわかってくれる人へのサービス。少人数の方がより本物を享

受できる。

湯快リゾートの食べ物は全て冷凍品。1万2千円でもその土地の本物を味わうことができるが、それは大規模旅館ではできない。6～7千円で本物を享受することはできない。かれらはせいぜいもって十年程度。ジーニュイン・ジャパンは東京ではできない。

金沢は江戸文化の象徴。京都は古代から公家文化もなにもごっちゃになっている。金沢にあこがれるのは江戸文化に集中しているから。前田が文化を涵養していった結果。山中はそれに対してどう生きるか。金沢にないものをうりものにしていく。明治20年の版木での山中の絵地図があるが、それがボローニアにそっくり。

エンリコ氏にいったことだが、風土という言葉。私達は土人(つちびと)、あなた方は風人(かぜびと)、その両者が交じり合っているいいものを作る。だから外の人と接することは大好き。その意味で外国語を学ぶことは大事。

シカゴ、バンクーバー、イサカなどにいる友人に頼んで息子夫婦を8年間住ませた。義息は東芝をやめてそちらを選択した。それで英語が堪能になって、風人とのつきあいができるようになってきた。地の人と一体になっていくことも大事だ。

山中をこれからどうして行くかということについて、大規模旅館の経営者が時々相談に来る。それに対して私は部屋数を減らせとっている。しばらく経営的には苦しいだろうが、それを頑張るのなら国や県に働きかけて何とかするように努力する、と話した。地元の経営者が自ら頑張らなければ、一時的なカンフルでは栄養剤にならない。収容力が半分になって20%減収しても、その数字にとらわれず、充実感を得ながら数年間耐えよ、とっている。それは本人が決意しなければできない。

これからは非観光地的観光地構想。

観光地化すれば、湯布院のようになる。あそこも大規模旅館ができそうになっている。山中には私に共鳴する人がなかなか現れなかったが、湯布院は数人の人が地域づくりを続けてきた。けれども観光地化に歯止めをかけられなかった。黒川温泉ですら少しずつ客が減っている。合併で景観破壊に歯止めがかけられない。

山中は合併自治区がなにも活用できていない。加賀市長は新しいことばかり打ち出しているが。町の人は合併の挫折感のさなかにある。

(佐伯)温泉地を生かす長期滞在型の宿泊について。温泉医療センターとの関係について。

(上口会長) 実験的にやりながら続けたいが、こちらから火付けした。

私も実験台になってやったこともある。

アメリカから入ってきた点滴療法。温泉病院と金沢工大が連携して、うちで温泉に入って低カロリーの昼食を食べていただき、病院で治療をするということを実施してみた。病院で、入浴前に、食後に、入浴後にそれぞれ検査をした。この宿に入った段階でゆったり

したのだろうか、数値がグンと改善した。

ホームドクターのように、旅館と病院が提携して、往診をしてもらうような仕組みができれば。地域の病院は医師数が減少してしまっていて存続が難しくなっている状況があるが、温泉と結びつくことで逗留をしていくような形に。